



■「福井県本部賞」受賞作文が
中学校国語副教材に決定

福井県本部主催の作文コンクールで、今年、福井県本部賞を受賞した神門生匡（坂井市立春江中学校1年）君の『僕ができる親切』が、平成29年度坂井市の中学校国語副教材に採用されることが決定。11年も寝たきりの祖母の看病を通じ、自分が体験的に感じた「親切は思いやりの心から生まれてくる。親切に大きいも小さいもない」と綴った作文は、私たちに多くの示唆を与えてくれます。

■平成28年度作品集

タイトル…『しんせつ日和』
価格…400円（税込・送料別）
発行日…平成29年2月15日予定
購入方法…ホームページ・TEL・FAX・メールにて

■各地でつどい・表彰式・推進大会を開催

10月13日	鹿児島県	鹿児島県本部	県大会
23日	山形県	米沢の会	つどい
24日	千葉県	市原市支部	実行章伝達式
29日	大分県	大分県本部	作文コンクール表彰式
11月4日	岐阜県	岐阜県本部	飛騨地区実行章贈呈式
12日	福岡県	北九州市本部	市大会 実行章贈呈式
	長崎県	長崎支部	 祝辞をのべる運動本部 小林和明理事
12日	香川県	香川県本部	県大会
16日	徳島県	徳島県本部	実行章贈呈式
17日	山形県	山形の会	作文コンクール表彰式
19日	福井県	敦賀支部	県民のつどい
	広島県	広島県本部	県民のつどい
22日	山口県	周南市熊毛支部	作文コンクール表彰式
	静岡県	静岡県本部	創立20周年記念 フォーラム
23日	山口県	周南市徳山支部	推進大会
26日	山口県	柳井支部	推進大会
27日	山口県	阿知須支部	あじすふれあい フェスティバル
30日	宮崎県	宮崎市支部	実行章贈呈式
12月3日	群馬県	富岡支部	つどい
	埼玉県	埼玉県本部	つどい
8日	山形県	長井の会	つどい
	香川県	琴平町支部	実行章表彰・各種伝達式
10日	山口県	由宇町支部	推進大会
	山口県	小郡支部	推進大会
11日	秋田県	秋田県本部	つどい
14日	千葉県	松戸支部	作文コンクール表彰式

■力作「小さな親切」運動
かるた完成

田子育良さん
（福島県在住）



「小さな親切」運動特任推進委員が、一年の歳月をかけてオリジナルかるたを作成しました。これは、前号の「恒さんが行く」を読み、新生「小さな親切」の一助にと田子さんが企画したもの。まず

は、情報誌から読み札となる情報をピックアップし、その後絵札を描いた力作です。

運動発足からの歴史を詠んだかるたは、運動あるあるとして楽しめます。※作品集・かるたは本誌17頁にて紹介。

ありがとうコーナー

私は運動の趣旨に賛同し、入会（入会年は忘れております）して現在に至っております。今日まで、主に

加古川市内47名の方々を「小さな親切」実行章に推薦させてもらい、実行章を贈呈しております。

89歳になり、いっお迎えが来るか不明ではありますが、寄附をさせていただきます。ご受納ください。「小さな親切」運動がいつまでも続きますように祈っております。

兵庫県 山崎忠一

1981年にご加入いただき、35年が経ちました。私が職員となつて37年ですので、一緒に運動

を歩んだ同志のように感じます。現在、80代、90代とお元氣な会員さんが多数おられ、「小さな親切」が長寿の秘訣？ではと感じております。ご寄附に感謝!! 公益社団法人は寄附を募り、さらに親切運動を全国津々浦々に広める使命を担っておりますので、運動推進に使わせていただきます。



はがきキャンペーンの審査会後、後援企業であり、審査員もお引き受けいただいている日本郵便株式会社切手・葉書室担当部長の成田喜浩様から、こんな素敵なお葉書をいただきました。電話やメールとは違う、文字の力を再認識するとともに、悪筆を理由に文字から遠ざかっているわが身を恥じた次第です。

【寄附金御芳名】(敬称略) 10月末〜12月末

静岡県 山下久二
三重県 伊藤英樹
青森県 似鳥初彦
和歌山県 阪口繁昭
三重県 北出正之
東京都 小林和明
山口県 天野洋子
神奈川県 尾川邦秋

第7回 発表!

「おとなの作文」

原点はあの日の兄嫁

大阪府 木口 公きみえ

46年前の初冬。脳卒中で倒れた父は、ごうごうと鼻をかきながら眠るだけだった。

往診したお医者様から、舌を嘔むおそれがあると言われ、割箸をタオルで巻いたものを口にくわえていた。

タオルは2時間もすると唾液でぼつてりと濡れる。気道からの出血か、タオルに血が滲むこともあり、頻繁な取り換えが必要だった。

母の助言もあり、使用済みのタオルは金だらいにまとめ、いっぱいになったら納屋のポリバケツに移すことにした。持ち運び役は高校生の私。

わが家はトイレも風呂も家の外という昔ながらの農家で、母屋から納屋に行くだけでも体が冷えきる。

母と兄が、次々にやってくる親族の対応に右往左往しているのを横目に、私はあの人どこ行ったんぢやろ。

ちいたあ手伝ってくれてもええのと、金だらいを納屋に運びつつ愚痴た。前夜、兄にくっついて大阪から来た彼女のことを頭に浮かべたのだ。

父がこんな時にオレンジ色のコート着てくるなんて非常識!とも。黒っぽい衣装で来ても、それはそれで縁起でもない腹を立てただろうが。

父はその日の夕方亡くなった。ばたばたと周囲が片づけられていくなかで、私は金だらいに積まれたタオルを眺めていたらしい。傍らで母がぼそりと言った。「洗うわけんもいくまあ。裏山に穴あ掘って埋めるかのう、タオル」。

母の言葉が他人事のように聞こえた。私はうつむいたけれど、なにも考えていなかったように思う。

父の死を受け入れられないまま金だらいを抱えて納屋に行くと、バケツがない。ぬるぬるの、血の混じった白いタオルは気持ちのいいものではない。

親族の誰かがどこかに隠してくれたのかも、と納屋の裏手に出て仰天した。軒下に紐が渡され、30枚近い白いタオルが掛けられていた。

井戸端では、二十歳だという兄の許嫁が腰をかがめ、井戸から汲み上げた水で残りのタオルを洗っているのだった。腕まくりした両手がみみずばれを思わせた。

まだ正式に紹介されていない彼女は、親族が控える母屋に入ります。ことがばかられ、ひとり寒空の下、タオルを洗っていたのだった。

兄嫁となった彼女と私は年齢も近く、よく衝突する。でも、あのときのことを脳裡に巡らすと、私の心はたちまち柔らかくなる。すぐに仲直りできる。

私の、親切への道第二步は、いつも兄嫁のあのときを頭に描くことから始まる。それは勇気だけでなく、使命感をも与えてくれる。